

【優 秀 賞】



氏 名 鄭 天祺
(テイ テンキ)

国・地域 中国 

在日期間 5 ヶ月

学 校 武岡台高等学校

タイトル : ゼロの気持ち

皆さん、こんにちは。私は中国の天津から参りました鄭天祺と申します。

「もっと広い世界に行ってみたい」

16 歳になるまでの私はそう思っていました。そして去年の 9 月、私は 1 年間の留学期間を過ごすため鹿児島にやって来ました。来日前は、留学に対して美しいイメージしかなかったのですが、実際に私を迎えたのは、自分の想像と全然違う現実でした。

最初に驚いたことは、ホストファミリー宅の料理に肉がほとんど入っていなかったことです。聞いてみると、お母さんがベジタリアンだからでした。とても小さなことですが、肉が大好きな私にとって本当にショックでした。それだけではありません。ゴミの分別も細かくてなかなか慣れませんでした。ホストファミリー宅での生活習慣も中国とは全然違うので、一つずつ学ばなくてはなりません。「これは私が期待していた留学生活ではない！」という思いがあふれながらも、常に気を遣って生活をしていたので、来日して二週間が過ぎた頃には、もの凄く疲れてしまいました。「自分は絶対に間違っていないと思って行動しているのではないか。」と指摘されたこともあります。そう言われてしまうと恥ずかしくて交流の意欲も無くなってしまい、気がつくとは私は孤立しており、初めて孤独を感じました。広い世界と向き合うために日本に留学したのに、壁にぶつかってしまい、なかなか日本での生活に馴染めず、自分の想像と全然違う留学生活に対して「日本に来たのは間違いだったのかもしれない」と 16 歳の青春を無駄にしているような気持ちになったものです。

本当に我慢ができなくなった時、ホストファミリーのお父さんに相談してみました。私の悩みに対して、お父さんは「知らないことに対しては、『ゼロの気持ち』を持つのが大事だよ。」と言ってくれました。しかし、期待と現状の違いに落ち込み、いっぱいいっぱいになっていた私は、その話を理解する余裕もなく、その時はただ「凄く難しい言葉だなあ。」くらいに思っていました。

そんな頃、中国人の友人と一緒に出掛けて、洋服を買う時のことです。「とてもきれいで似合いそうだね。試着してみたら？」と友人が薦めてくれたのですが、きっと私には似合わないと思い断りました。ところが、友人は諦めずに、「自分でそう思っているだけで試着してみないと似合うかどうか分からないよ。」と再度勧めてきました。仕方なく試着してみたところ、意外にも自分によく似合っていたのです。その瞬間、突然お父さんが言っていた「ゼロの気持ち」という言葉を思い出しました。

その後、留学生活はそのまま続いています。私の中で少しずつ変化が起き始めています。お母さんの作った野菜中心の料理が好きになり、「健康問題」についても関心を持つようになりました。そして、異なる生活習慣や自分と違う考え方に対して、「そうではない」と決め付けず、まずは受け入れて、積極的に理解しようと努力するようになりました。

留学前、私はずっと自分の期待で留学生活を想像していました。期待というより先入観と言った方が適切かもしれません。今考えてみれば、もしも期待通りだったら、私は未知の世界に目を開くことなく、新しい思考や習慣の優れている点にも気づかないまま留学生活を過ごしてしまったかも知れません。お父さんの言ってくれた「ゼロの気持ち」に気づいたことで、私は日本での留学生活に馴染んできて、日常を楽しめるようになったのです。視野が広がって、人生観も変わったように思います。今ではホストファミリーと本当の家族のように仲良くなり、鹿児島のこと大好きになりました。これからもお父さんに教えていただいた「ゼロの気持ち」を持ち続け、広い世界で未知のものに出会って、恐れずに向き合っていきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

